＜スケジュール＞
12月3.4日　医学連第18回大会
12月5日　保安処分粉砕全国共闘会議結成大会
12月7日　沖縄関連法案粉砕全関西労学集会（中ノ島公園）
12月10日　沖縄関連法案粉砕全関西労学集会（同志社大学）

☆世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界党—世界赤軍を建設せよ！
共産主義者同盟全国委員会

烽火

戦旗社
中央戦旗社　東京都本所郵便局私書箱44号
大阪戦旗社　大阪市大淀区本庄中通3—33　電話（06）371—3706
12月1日　266号
編集兼発行人高木一夫
一部30円

11・19北大阪・梅田を武装占拠!!

11・10〜19連続闘争を圧倒的に貫徹する!!

赤ヘルメットの同志諸君！

プロレタリア人民・兄弟達！

革命的な「烽火」読者諸君！

一一・一九北大阪の夜をこがした赤ヘル軍団の火炎ビン突撃は、文字どおり北大阪—梅田を武装占拠し、一時間有余にわたる敵機動隊との攻防を勝利的に貫徹し、蜂起に向けた武装斗争の警鐘を全人民に告げ知らせた。

何人も認めざるをえない赤ヘル軍団の勝利は、一一・一二共産同政治集会をもって開始したわが共産主義者同盟全国委員会の非合法党建設の第一歩の勝利である。党の戦斗団＝反帝戦線、党の最前線で日夜戦い抜いている非合法・非公然メンバーの勝利であり生気ある叛軍活動家の戦いの勝利である。

突撃前段の戦闘

一一・一九の赤ヘル軍団の突撃に先き立ち、権力との攻防は日常不断に開始されていた。「このデモで一部過激派が〃御堂筋武装占拠〃、〃南大阪制圧〃を叫んで爆弾を使った ゲリラを展開する恐れがある。」といった爆弾キャンペーンを張り、内ゲバのフレーム・アップ等々、ありとあらゆるデッチ上げ、デマゴキーを吹聴し、市民社会末端まで反革命に組織しようとした。

日夜、革命運動に従事する同志達に、白昼公然と白色テロルの嵐をまきちらし、活動家諸君への目に余る隠然な恫喝をかけてきた。そして、今や反革命のお墨み付きの「警察手帳」をちらつかせ、なぐる・蹴るのリンチを加え、「俺はヤクザだ」「文句あるなら、かかってこい」お前らを殺してやる」と挑発をくり返した。

権力が、卑劣な弾圧を武装斗争に恐怖し、わが軍隊の赤色テロルに恐怖し行えば行うほど、わが同盟と わが同盟に牽引される階級諸組織の、鉄の団結が強まるのである。とりわけ、赤ヘル軍団の意気ケン昂たる態度と実践は敵に消耗を、味方に勝利の確信を具体的に指し示した。

もはや、一一・一九斗争の戦闘宣言と突撃が、全人民内部に深く非公然に、公然に伝わり、支持されているのを知るや、全大阪を恐怖の白色厳戒体制下に置いた。それでも不安になるや、下鴨署襲撃事件なるものをデッチ上げ、一九日早朝わが同盟の支持者であるというだけの市民の自宅を含め十五ケ所という 無差別の家宅捜索を行なったのである。

恒常的な反革命体制＝機動隊のジュラルミンの盾が、本土—沖縄の街頭や、主要な権力機関を包み込めばこむほど、沖縄返還協定批准阻止の叫びが高まり、一握りの 支配階級の私兵＝機動隊への憎悪が増す。この歴史の心然を知っている権力は、階級支配の最後の切り札たる破防法—騒乱罪の恫喝を設き、無骨な階級的意図で敵対してきた。

白色テロル、リンチ、電話の盗聴、家宅捜索、もはや何も手に入れることができなかった権力は「破防法—騒乱罪」でブントをつぶしてやるというまで追いつめられたのだ。事務所、拠点への二四時間の監視は、せいぜい政治警察の何たるかを、ブルジョア・ジャーナリストへさえ問返えさせるだけなのだ。

わが同盟を先頭に、階級諸組織に到るまでの反撃は、断じて権力の弾圧を許しはしない。権力のブタ政治警察官よ、「目には目を！」「歯には歯を！」「奴は敵だ！敵を殺せ！」の合言葉は、君達への言葉であることを現実に示そう。突撃前後の弾圧へは階級的報復あるのみ！

革命的警戒心、赤色テロル、階級的復報を大断乎として貫徹しスパイを排除し、同盟中枢の革命的防衛、これへの全同盟員、諸級諸組織の活動家の動員から、我々は非合法党建設と武装斗争の勝利をわが手にするのだ。武装斗争と大衆運動を結合するのは、政治路線のみではない。わが同盟にとっては当り前、党の作風、法風武装斗争の日常なのだ。非合法党建設への観念論者、政治警察との斗いは二四時間存在するのだ。「権力にパクられたくない」などという前に、権力にパクられる斗争をやりたまえ！ズブズブの合法主義の裏返しとしての秘密主義になり下り、ネズミ花火的軍事？人非合法？これ等が「非合法党建設、武装斗争」だって！追われる前に権力から逃げ、パクられたくない限りの武装斗争、権力斗争へ何の基準のないネズミ花火的軍事…全くプロレタリア政治、党とは無縁な唯我独尊集団と、わが同盟・階級諸組織が訣別したのは、全く正しく必要なことであった。突撃前段での勝利は、決定的だ！さあ、血のにじむ党建設の教訓を突撃へ政治路線＝烽起」への核心を沖縄斗争の勝利へ、文字どうりの権力斗争へ！

一一・一〇沖縄全島ゼネストを突破口とする沖縄返還協定批准阻止の総力を上げた連続武装斗争は、一一・一〇全関西労学総決起集会、一一・一二共産同政治集会、11・14首都—全国武装斗争11・17全関西労働者政治集会の成の中にある。二十四時間の政治警察との攻防にある。我が反帝戦線、反軍の宣伝隊の、政治警察、右翼、日和見主義党派の敵対、妨害をうち砕いての連日の梅田を中心とする街頭、拠点への大量宣伝煽動にある。青年労働者・学生のオルグにある。

非公然—公然に、非合法—合法に、大胆に、革命的警戒心で、！

突撃開始

午後七時、反帝戦線・反軍・京学連を主力とした赤ヘル軍団は、すでに日は没し、前方に北大阪、梅田をみる阪急中津駅に、公然に二百の部隊を登場させた。地から湧き出た赤ヘル軍団は、インドシナの解放軍のような勝利への確信に満ち満ちている。突撃の前の静寂が、部隊の緊張の中を横切る。

指揮官の号令で、素早く隊列を整え、初歩的な武装をする。路上の自動車のサーチライトに浮彫りにされ、軍団は幾何学的な美しさをみせる。

突撃のアジテーションが、尖鋭に戦士の胸に刻まれる。「機動隊セン滅！」突撃の確信だ！この言葉を最後に進撃を開始する。

鉄の長方形の赤ヘル軍団が、行軍する。十数本の赤旗が前面を、高潔な笛音が空間を、軍団が路上を行軍する。

シュプレヒコールが、力いっぱいたたきつけられる。同時に路面いっぱいに軍団が広がる。初歩的な武装から、重武装へ。戦士の創意工夫で、全てを武器へ。プロレタリア戦士にとって、全てのものは、階級闘争の武器に転化できる。雄然とした赤ヘル軍団の武装デモだ。

デモに引きこまれた、無名戦士が、参加し、軍団に後続する。感激した小商店の見知らぬ青年が、積極的に武器を提供する。街頭は赤ヘル軍団の武装デモで、完全に制圧される。 自動車が長蛇の列をつくる。

前へ！前へ！ 大胆に！大胆に

突撃

！北大阪梅田陸橋、いよいよ戦場だ！

歩行進軍から、かけ足へ、一挙に加速する。赤ヘル軍団二百のトキの声、国鉄大阪鉄道管理局前を突き抜け、梅田陸橋をかいくぐりあっという間に大阪駅前広場交差点付近を武装占拠する。軍団は、第一回の突撃の準備を完了し、交差点いっぱいに広がり、敵機動隊の到着を待つ。

戦法は、大胆に「三里塚」で実現した待ち伏せ遊撃戦、奇襲戦を敵の心臓部＝大都市で決行することだ。赤ヘル軍団は、できるだけ広く路面を占拠する。敵をできるだけわが軍団の懐にとび込ませる、最初の突撃で恐怖をあたえ、寸断しセン滅するのだ。わが軍団のまわりは、万余の大衆で埋っている。

神出鬼没な都市遊撃戦の初歩的ではあるが、有利な布陣ができた佐藤自民党政府の私兵＝機動隊はとんで火に入る悪の虫だ。

午後七時十五分頃、完全武装の機動隊一個大隊が、三台の輸送車に分乗し到着する。同時に、「突撃」を合図に赤ヘル軍団は、全員突撃する。拡がっていた赤ヘルが一挙に線になり、点になり、強固な軍団になり、輸送車の一メートル前に接近する。輸送車の中で、恐怖に顔を引きつらせ、ますます醜悪な姿をみせている機動隊員は、輸送車の陰に身を伏せる。最初に、三十本の火災ビンが投火される。「バッバッバンー」という爆音とともに、輸送車は火を吹く。軍団の第一小隊が引く続けて第二小隊が、火災ビンを投火する。かろうじて輸送車からとび出した機動隊が、火ダルマになり、転げまわる。

盾走した機動隊は、第一回の突撃で機動隊大隊長を失い、大混乱に陥いり、背中をみせて逃げ回るから、一勢に勝利の拍手が起る。街頭の青年労働者・学生・市民勝利を確認した大衆が、戦闘に加わる。街頭は、一挙に闘う人民でふくれ上る。

軍団は、次の突撃にそなえて再度路面いっぱいに広がる。武装占拠した路面の真中に火災ビン、鉄パイプを満載した武器トラックを到着させる。鉄パイプと、火炎ビンを補給し、トラックを中心に、小隊ごとの突撃をくり返す。火炎ビンの雨は、百メートルにわたる道路を火の海に化す。

もはや、機動隊は、手を出すことができない。爆竹が無数にサク裂する。北大阪の夜空を焼きつくした。

勝利の核心は、火の海の真赤な人民の炎にあるのだ。もはや万事休止とみた機動隊は、姑息にもバス停で バスを待っている市民を盾に突撃してきた。市民が逃げる。再び赤ヘルは、線になり、点になり、軍団になり、突撃する。火炎ビンの火力は、前回の数倍だ。一勢にサク裂する。機動隊の盾が、ぶっとび、火ダルマの機動隊が逃げる市民の足元をころげ回る。

阪急百貨店前の突撃は、火炎ビンに続き、鉄パイプをも混えての熾裂であった。歩道にころげ落ちた盾は、黒焼けになり突撃のすさまじさを物語っている。

一たん国鉄大阪駅北口と大阪鉄道管理局にはさまれた三差路に引き返し、武器の補給を行う。同時に、工事用の防護サクとトラックをタテに解放区闘争に移る。群衆は、約二万にふくれ上り身動きできなくなり、阪急三番街は人民の海でうまる。突如、群衆が「後に回ったぞ」と機動隊の動きを知らせる。大鉄局横にゴキブリの様に一個大隊が現れる。

火炎ビンが雨の様に投げられる身動き一つ出来ない機動隊と、赤ヘル軍団との対峙から、一進一退の攻防をくり返す。

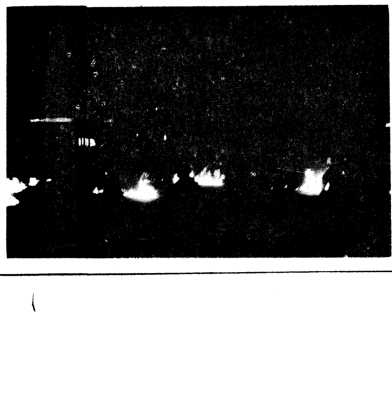
どうしても解放区をつぶせないとみるや、機動隊は、ガス弾を射ってきた。ガス弾は、赤ヘル軍団に一発も当ることなく、三番街に直接にとび込んでいった。あたり一面、催涙ガスが充満する。ガス弾と火炎ビンの攻防が続く、解放区は白煙の中にくっきりとその対峙線を画す。

機動隊は、増援部隊と、私服部隊を配置し始める。武器は完全に使用し切られる。あとは、赤ヘル軍団を肉弾軍団に化すのみだ！十数人が軍団をつくり突撃す。鉄パイプがジュラルミンの盾にぶっかるにぶい音がする。

序々に軍団は、人民の海の中に消える。遅れてきた私服警官は、一人も逮捕できない。人民の海の中でも、五人グループを作り私服を襲撃する。

肉弾部隊が、壮絶なテロ・リンチをうけている。人民が、「やめろ、機動隊」と次々に叫ぶ。人民の最も闘うものへの憧けいと、英雄への最後の声援が続く。「ブントよくやったぞ！」「赤ヘル、ガンバレよ！」

群衆は、午後十一時になっても帰らない。ただ機動隊の指揮車からの「市民の皆さん帰って下さい」が、敗け犬よろしく、遠吠えするだけであった。



11・19武装闘争の勝利を沖縄関連法案・自衛隊派兵阻止に拡大せよ!!

敗走する機動隊の姿に、アジア侵略反革命戦争への泥沼に踏み出しつつある日本帝国主義権力の行末がくっきりと映し出された。沖縄返還協定の強行採決が、確実に権力の首を締めつけるものであることを、赤ヘル部隊の周りに結集した数万の大衆の「機動隊をやっつけろ！」の怒号が証明した。敵を更に追いつめよう。

日向派を筆頭に、今秋闘争から逃亡した日和見主義的諸党派の破産は誰の目にも明らかである。11・19北大阪制圧闘争の勝利を更に一歩、12・7、12・10へと拡大し、沖縄返還協定に秘めた日帝の野望を打ち砕き、沖縄関連法案を断固として粉砕し、自衛隊沖縄派兵実力阻止に向けた隊列を強化しようではないか。

積極的に疲れを知らぬ熱心さで、我同盟は、突撃を前にして、否、日常不断に進撃した。

「戦えば、かならず勝利する」このことを抜きには、権力闘争は構築できない。プロレタリア、被抑圧民族人民を、未来へ飛躍しえない。

勝利への突撃、真赤なプロレタリアートの魂、ブント魂がうづく！

五百三十名を結集して 11・12共産同政治集会を圧倒的に勝ち取る

11・19武装斗争の陣型を構築！

全国の赤ヘルメットの同志諸君！反帝戦線の兵士諸君！革命的な「烽火」読者諸君！

沖縄返還協定批准阻止の 今秋武装闘争に対する、戦いの宣言を明らかにした11・12共産同政治集会の報告を行ないたい。

沖縄返還協定批准実力阻止闘争を目前にして、11・12、大阪府立教育会館に於いて全関西各地から結集した革命的赤ヘル兵士及び我が同盟に結集する戦闘的労働者、学生、市民が続々と詰めかけて五百三十名でもって集会は圧倒的成功裏に勝ちとられた。

集会開会前からすでに五百名をゆうに越える赤ヘルメットの兵士で会場は埋めつくされ、ムンムンとした熱気が立ちこめ、今秋武装闘争への決意によって満たされていた。

集会は定刻の午後六時に開会され、まず、本集会に五百三十名が結集していることが報告され、それを満場の拍手と「異議なし」で確認された。そして、赤ヘル反帝戦線の司会の下で開会を宣し、隊友「反戦、三里塚現闘団から特別報告から始まった。

続いて本集会並びに今秋武装闘争に向けての基調報告が共産主義者同盟（全国委）政治局員である永井武夫同志から報告された。永井同志は ①「民族解放闘争の前進とニクソン訪中」に関してまず現求し、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制としての 米帝を主軸とする侵略・反革命体制と、ひいてはロシア革命以降の過渡期世界での米帝を軸とした支配体制を根本的に動揺させたのはベトナム人民を先頭とする民族解放闘争であり、社帝との党派闘争（＝中ソ論争と文革）を通じてその大後方となった中国であり、その結合であった。ニクソン訪中は、民族解放闘争に対する米帝の敗退と世界支配体制再編、即ち、第一に民族解放闘争と大後方としての中国の分断、第二にドル防衛策と一体となった侵略反革命同盟の再編強化への企図であり、その成否は、中国の変質に大きくかかっている。そしてそれは ①中共の党的立場—国際階級闘争、党派闘争に対する ②米帝の侵略反革命の再編に現実的な 反撃を準備しているか否か—の二点で判断されねばならない。②については、周辺革命論にもとづく限界はありながらも、インドシナ三国、北朝鮮、アジア諸国の中共派のゲリラ準備と、米帝と日本軍国主義に対する闘争を堅持する闘いは疑いのない所である。

①については（イ）「スターリン綱領」—（ロ）中国国家・階級分析—（ハ）新民主々義＝人民戦線路線総体として、しかも具体的な実践過程に於いてその内容がどんな意義を有したか、という点から評価されねばならない。毛の立場はコミンテルンを条件として（ロ）—（ハ）を内容とし、それ故、党派闘争＝世界党の建設問題は除外され、党の内実は（ロ）—（ハ）となり、就中（ハ）となる。特に五六年スタ批判以後、一方では社帝との国際党派闘争が浮び上りつつも、それへの党的基準は逆に（ハ）に純化され、プロ独国家の問題を欠落させざるを得ず、運動としてしか党派的基準や社会主義建設の問題を設定できない。従って、侵略論としては周辺革命論として、社会主義建設を前提とした自力更生等々とならざるを得ない。

我々は、スターリン主義の成立と、先進国革命の敗北の結果として強制された最前線としてある民族解放闘争—中国と「結合」し、それを世界プロ独と世界党建設へむけた党派闘争として止揚せねばならない。

②「日帝の危機と侵略反革命戦争遂行体制」

ヤルタ体制の崩壊と米帝の世界戦略の再編日帝によるの危機、即ち侵略反革命同盟の再編と米帝との経済的対立の著しい高まり、この二つの課題を処理する上で、日帝は、前面に表われた中国問題を、過渡的な上層の一定の分裂（日中派—相対的に「韓」台に権益を持つグループ）にもかかわらず、最大限に利用し、中国の「変質」の策謀とプロレタリア人民の解体を企て、侵略反革命戦争遂行体制の構築を行おうとしている。

この中にあって民主連合政権樹立をかかげて進出している日共の主張の核心点である 中ソを軸とした国際統一戦線とは、民族解放闘争の階級闘争としての、中ソ論争の国際的党派闘争としての地平を、一般的自決権とソ連社帝の水準にあわせる反動的見地であり、民主連合政権とは、帝国主義を打倒するのではなく、それに反対する国際的統一戦線を形成するという国際的立場を核としているのであり、我々はこの民主連合政権構想を一貫した闘争を通じて断固バクロせねばならない。

③「新左翼運動の革命的左翼と日和見主義的翼への分化」

強制された最前線としての民族解放闘争に援けられて成長したプロ独派の運動が、六九年を境にして蜂起と 政府問題を日程にのぼした時に必然的なものとなった、従来の新左翼運動に於ける明確な分化は、第一に国際主義を、特に民族解放闘争に対する立場をめぐるものであり、第二に、沖縄、三里塚、入管、部落解放等の一連の政治闘争に対する態度であり、第三に、組織問題である。この三点を分岐点とした新左翼運動のメンシェビキ的翼、革マル・宮下四派と我々、連合赤軍そして党的立場に於いて一層動揺的ではあれ 中核派という革命的翼への潮流としての分化はいまや一層公然とさせ、革命的潮流として単一の非合法党のもとに体系化せねばならない。

一時間に及ぶ永井同志の基調報告は「11・14〜11・19連続闘争を機動隊殲滅をめざして闘い抜け！」という呼びかけでもってしめくくられた。そして、その中で、はっきりと11・19闘争を「南大阪制圧、御堂筋武装占拠、機動隊殲滅」の大武装闘争でもって貫徹することを大胆に宣言したのである。

永井同志の報告が終るや否や、それまで一言も聞きもらすまいと静かに聞き入っていた全ての同志から、満場割れんばかりの拍手が巻きおこり、「異議なし」の賛意と伴に、会場のあちらこちらから「機動隊殲滅！」「南大阪制圧！」の雄叫びが発せられたのであった。

その後、その熱気をはらんだまま、各戦線の代表が登壇し、決意表明を明らかにしたのである。中国、四国、関西各地の反帝戦線、京学連からの決意表明、そして階級的労働運動を戦闘的に戦い抜いている北大阪叛軍、刑法改悪—保安処分粉砕闘争を 断固貫徹している 保安処分粉砕関西共闘会議からの力強い闘いの報告をうけたのである。

そして最後に、いやがうえにも盛り上がる戦いの雄叫びの内に、反帝戦線関西書記局の同志が登壇し「敵権力に対しては、目には目を！歯には歯を！佐藤政府の私兵＝機動隊を殲滅せよ！」「南大阪制圧、御堂筋武装占拠の戦いに最先頭を責任をもって担い抜く！」という決意を明らかにし、それをうけて、万雷の拍手と「意義なし」の檄の嵐がまきおこったのである。

そして最後にスローガンを全員の拍手でもって採択し、インターを斉唱して全ての議事を終了したのである。

閉会後も、直ちに戦闘体制の確立をめざし、各地区ごとの会議に移り、11・19闘争への決意を新たにしたのであった。

赤ヘル労働者二〇〇名を結集
蜂起―プロ権力樹立に向け強固なヘゲモニーの構築!!
11・17全関西労働者政治集会

11・1労働者政治集会に結集し、19〈扇町―御堂筋制圧―南大阪占拠〉機動隊殲滅に結合して、政治ストを貫徹せよ！

沖縄返還協定批准阻止！佐藤政府打倒！機動隊セン滅！

沖縄返還協定批准を阻止し、帝国主義者の侵略、反革命行動の破綻をかちとってゆく闘いは、十日、十四日すでに開始された。

ベトナム人民の不屈の闘いに敗れ去ったアメリカ帝国主義者は、「アジア人をアジア人と闘わせる」ニクソン声明をうち出した。しかし、そのための前提であるラオス、カンボジア侵略を中朝インドシナ三国人民は固い団結ではね返した。ニクソンは窮地におちいり新たな対応を迫られ、息つぎを求めている。戦後処理を、ソビエトとアメリカの世界分割として行ったのがヤルタ体制であった。中国革命はこれを突破し、アメリカ帝国主義者は、これを「封じこめる」反革命同盟を強化してきた。日米安保条約と沖縄の軍事要塞化はこの中心環であった。このヤルタ体制が、このようにして最終的に破綻しているとき、帝国主義者の手によってこの体制の手なおしを許すのではなく、我々、帝国主義心臓部プロレタリアートの任務として、ブルジョアジーの権力を打倒し、蜂起―プロレタリア権力を樹立する闘いに結びつけよ！

日帝の侵略・反革命に対決する戦斗的階級的労働運動を構築せよ！
内藤・人文社・小林・釜ケ崎・細川・平和台・港相互斗争勝利！

佐藤はこのために困りはて、動揺し、内輪もめを起している。しかし、彼らの生きのびる道は、日「韓」台の侵略、反革命共同体しかない。そのために、沖縄返還協定批准をやりきり、銃後―国内支配を維持することにかけているのである。

自民党、佐藤の私兵＝機動隊をのさばらせておいて、自民党・佐藤を打倒してゆくことはできない。職制、右派組合、府警（政治警察機動隊）、右翼ガードマン、自警団、町内会の地域、学園、職場における権力支配を許しておいて、自民党・佐藤を打倒してゆくことはできない。

内藤、人文社、小林、釜ケ崎、細川、平和台の最小限の要求を掲げた斗いに対してすら、全面的に権力は登場している。組合つぶしとレッド・パージが「常識」であり、権力がこれを守っている。

沖縄、三里塚人民の斗いはこれを打ち破り前進している。

全ての労働者人民は、沖縄、三里塚、中小未組織労働者の斗いをうけつぎ、守り抜き、発展させてゆかねなければならない。

17集会において、その強固な意志一致をかちとり、19〈扇町―御堂筋制圧―南大阪占拠〉機動隊セン滅に結合する政治ストを貫徹せよ！

（11・17集会実行委員会ビラ）

我々が11・17全関西労働者政治集会を開催したこの日は、二つの権力の攻撃によって記憶しておかなければならない。自民党は衆院特別委員会において沖縄返還協定の強行採決を行った。さらに神戸の地において「白衣の監獄」を打ち破ろうとする一年有余の斗いを展開してきた平和台病院労組、共斗委員会に対して、阿部資本は病院閉鎖を通告してきた。

17集会はまさに、これらの権力の攻撃にこたえるべきものだったのである。

67年10・8以降開始された「国際主義と組織された暴力」反戦・全学連の街頭実力斗争は68年10・21・69年秋において、その頂点と限界に到達した。自民党・佐藤政府は、日韓条約締結に始まる本格的侵略、反革命体制を構築してきた。これに対して実力阻止闘争を唯一展開した反戦・全学連の前に権力は密集した反革命として登場し、これを封殺せんとした。

しかし、この権力の本格的侵略反革命の遂行、国内社会再編は、反乱する階級、階層を生み出した。沖縄・三里塚人民は暴動、武装闘争でこれにこたえ、右翼日和見主義者＝社共を放逐した。佐藤政府の下での本格的侵略反革命に実力闘争で立ち向ったこの二つの力が強力な結合を開始している。

大阪における全港湾建設支部に結集する中小未組織労働者の闘いは、沖縄・三里塚人民の闘いと同質のものである。資本、権力はこの闘いに恐怖し、一体となって攻撃をかけてきている。なにがなんでも組合をつぶしてしまう、労働者の最低限の要求をもふみにじる攻撃がかけられてきている。ここではむき出しの権力との闘いが闘かわれている。

この闘いを維持し、拡大し、強固な革命のヘゲモニーを構築することが我々の任務である。

集会実行委員会のこの鮮明な基調をうけて、全港湾建設支部の労働者からの三座建築事務所の闘いに始まる、西成、人文社、小林商店、内藤建築事務所と展開されてきた闘いの報告をうけた。なによりも、資本・権力一体となった攻撃の内容と、これに対する我々の対応の不充分性が指摘された。

平和台病院の緊急アピールを含め、最前線で闘っている小林商店、内藤建築事務所の闘いの特別報告をうけ、京大教養部戦線、関地区叛軍、日中友好協会（正統）をはじめとする戦線報告に移った。

国民会館小ホールに結集した労働者諸組織、赤ヘルメットの各戦線二〇〇名の前に、労働戦線における現在の具体的任務が、蜂起―プロレタリア権力樹立にむけて強固なヘゲモニーを構築することであることを鮮明にしたのである。

この集会において示された権力奪取―プロレタリア権力樹立にむけた党の目的意識性が、19日の戦闘を貫徹することによって、その端緒を獲得したのである。権力の集中的包囲の下における非合法戦闘の準備、貫徹。扇町に結集した一千名にのぼる赤ヘルメット建設支部における政治スト、デモンストレーションの貫徹である。この日の戦闘における闘いの結合の政治的、組織的不充分性を、我々は必ずや克服するであろう。

（17集会基調報告は次号掲載）

扇町集会

午後六時から、赤ヘル軍団の宣伝隊を中心として全関西の階級戦線を結集して、扇町公園で、四〇〇名の規模で行われた。雪崩うち、人民戦線派、社民の倒閣運動に屈服し、右傾化を開始している中で、真の革命的潮流に自らを鍛えんとする闘う人民は、途中司会者の「北大阪―梅田で突撃が開始された」の報告と同時に、北大阪へ向った。

また、南大阪―難波、御堂筋で待期している一万人のシンパにも「ブントが機動隊を突破した！」という報告が伝わり、北大阪への勝利の大移動が開始され、梅田での戦闘に合流した。

制私服一万千人という布陣を設いた権力は、「敗れた軍隊はよく学ぶ」という軍事の鉄則すら忘れ、三里塚の敗北をまた再び都市で味わったのだ！

赤ヘルメットの同志諸君！兄弟達！

革命的な〃蜂火〃読者諸君！

我が同盟が、「百戦百勝の党」と呼ばれるのは近い未来である。

革命的な労働者・農民・学生・市民諸君は、共産同（全国委）に結集し、〃蜂起〃とプロレタリア国際主義〃の旗を掲げ、大断平として不屈の闘いを開始しよう！「人民が闘えば、かならずや勝つ！」七十年代権力闘争とは、このことであり、沖縄闘争の勝利の核心も、単純明快なこの闘う人民の命題の中にある！

姑息なネズミ取り的爆弾闘争や、人民戦線派、社民のタイコモチの空文句、盲目的突撃しか知らぬ諸派を尻目に、共産同（全国委）は、「蜂起を組織する単一非合法党建設」に着手したことを宣言する。「蜂起への大会戦」、次の闘いの合言葉は、これだ！

二二〇名を結集して今秋闘争の隊列を建設
11・6判軍集会

今秋沖縄返還協定批准阻止を機動隊撃破、セン滅の戦いとして戦かわんとしている反帝戦線、叛軍及び全ての革命的・英雄的同志諸君にたいし、関西地区叛軍連絡会議から、11・6全大阪叛軍集会の闘争報告を行ないたい。

まずこの日、京都の地に於て自衛隊柱基地内部で行なわれんとした自衛隊の「祝賀式典」粉砕闘争が反帝戦線・叛軍・立命L戦、竜大全学戦線・洛北戦線に結集する赤ヘルメット二二〇名の同志によって断固として戦かわれたことを報告したい。

帝国主義軍隊として、アジア侵略反革命の軍隊として、帝国主義者の醜い私兵として、階級支配の最後の止め金として、戦後秘かに市民社会の奥深く成長し、五次防に於いては五兆七千万円にのぼる労働者から収奪した資金を腹いっぱい喰ってブクブクと醜く肥え太とらんとしているその醜悪な姿を隠ぺイし、「国益、国防」の名の下、全人民をアジア侵略反革命にかりたてるべく、そしてまた「間接侵略者」として我々革命的左翼を圧殺すべく、そのイデオロギー的弱さを糊塗せんがために、全国的に展開されている自衛隊パレードは、だがしかし、この京都の地に於いては、基地の奥深く、ひっそりと内輪だけの「慰さめ会」としてしかなされなかった事をまず確認したい。我々はこの逃亡にたいし、断固とした「追撃戦」を展開した。この戦いに恐怖した権力は、機動隊二百名を動員し徹底した弾圧体制をしいたが、我々は敵の攻撃に一歩もひるむことなく、いよいよ闘志を固め、最後迄戦いを貫徹したことを報告する。

続いて夜六時から電通会館において百二十名を結集し、全大阪叛軍集会が、今秋沖縄闘争を、断固とした武装闘争で機動隊撃破、セン滅による革命的人民との熱い結合を克取をものとして強固なる意志一致をかち取るものとして熱い息吹きの中に開かれた。叛軍の同志の司会にはじまり、京都隊友反戦の「御殿場に於て、一兵士が防衛庁防衛勤務命令の拒否と、その呼びかけの行動を断固として敢行した。日本帝国主義の侵略反革命体制構築は、諸階層人民の分裂と動揺をうながしており、自衛隊もまたその例外ではない。我々は自衛隊にたいし、更に更に情宣活動を展開しつつ、帝国主義の死滅の日迄、諸君と共に最先頭に立って闘かう」という力強い連帯のアピールが出された。

続いて、反帝戦線の同志から、大意次のような力強い今秋闘争に向けた連帯の挨拶がなされた。「今秋闘争に課せられた我々の任務は一点、次の点にある。日米共同声明＝ニクソンドクトリンの道、アジア侵略反革命軍事行動への乗り出しを、機動隊の警察的・軍事的独裁体制によって、三里塚・沖縄人民を筆頭とする諸階層人民の分裂と動揺を帝国主義的に集約しアジア侵略反革命に乗り出さんとしており、我が反帝戦線を頭とする革命的左翼に対しては佐藤帝国主義ブルジョア政府とも長成にしてきた私兵＝機動隊による徹底[illegible]えている。沖縄・三里塚[illegible]我々に蜂起の盾を持[illegible]を六十年代階級闘争の地[illegible]する闘いを問うているの[illegible]我々はこの地平を断固と[illegible]取るべく、今秋闘争を機[illegible]滅に向け断固戦い抜かな[illegible]らない。我々反帝戦線は[illegible]頭に立って闘う」との発[illegible]

[illegible]次に関西地区叛軍の書[illegible]の基調報告を「異議なし[illegible]熱っぽい雰囲気の中で[illegible]地区反軍からの今秋闘争[illegible]決意表明が出され、最後[illegible]ーを力強く斉唱し散会し[illegible]後、更に自衛隊に対す[illegible]らの解体攻撃をかけて[illegible]ろう。

私服・機動隊の白色テロをはねのけ
11・14〜19機動隊セン滅の闘いへの第一歩に踏み出す！
■■■■11・10沖縄ゼネスト支援総決起集会

全国の同志諸君！

沖縄返還協定の批准を自己の最後の延命として、ガムシャラにおしすすめるブルジョア国会―日本帝国主義にたいする怒りのるつぼと化した、沖縄での返還協定批准阻止の戦いに呼応し、それに連帯支持する闘いは関西の地にも真赤な火柱として燃えあがったのである。すでに陽が落ちた難波・新川公園には六時から開催される沖縄ゼネスト支援、全関西労学総起集会に合流する関西各地区の労働者・学生・高校生・市民が続々とつめかけ、集会の始まった六時過ぎには、公園は真赤なヘルメットと黒ヘルメットを中心に五〇〇名の戦士・先進的大衆で埋めつくされたのである。集会は関西地区叛軍連絡会議の同志と京学連代表によって京大教養部戦線の同志が司会に立ち、まず、集会の同時刻に、沖縄では史上空前のゼネストが成功裏に貫徹されていること、そして日米両帝国主義者にたいする満腔の怒りが渦巻いていることを全員の「意義なし」という連帯の表明と、熱烈な拍手で確認し、それぞれの戦線からの連帯と戦いの決意表明に移ったのである。

まず最初に登壇した反帝戦線の同志は「現代過渡期世界にあって、スターリニズムによる世界革命の敗北を、中朝インドシナ革命の勝利によって、新たなる世界階級闘争の前進が開始されているのである。なかんずくベトナム革命戦争の勝利、米帝国主義の敗北は第二次大戦の戦後処理として、世界分割を確定したヤルタ―ジュネーブ体制の根底的崩壊を促がし、ニクソン訪中、国連から台湾の追放と米帝国主義の敗北、後退を余儀なくさせ、日帝のアジアへの侵略、反革命軍事行動へ一層の拍車をかけているのである。そうした中にあって、七十二年沖縄返還は日・米両帝国主義者の間で取り引きされ、アジア諸国で激発する革命戦争に敵対し、日本国内での革命闘争を弾圧する要として沖縄を日帝に返還するのである。にもかかわらず、沖縄人民は帝国主義軍隊の基地が何であるかを見抜いているのであり、帝国主義者にたいする怒りは軍事基地撤去として、返還協定粉砕として闘かわれているのであり、現実的にアジア諸国での革命戦争の勝利に力づけられながら、彼らとの連帯を深めているのである。それは日本階級闘争とアジアの革命戦争を現実的に結ぶつけているのであり、世界革命戦争への拡大を索しているのである。今秋から闘かわれる沖縄闘争が将にそうした国際主義のるつぼの中で闘かわれ、試されているのであり、沖縄国会―沖縄返還協定批准を武装闘争として爆砕しなければならない。そして、我が反帝戦線はその武装闘争の最前線を荷いきることによって、階級闘争の新らしい地平を切り開くであろう。」と発言し、満場の拍手と「意義なし」の熱烈なる戦いの同意を背にうけて降壇したのである。

反帝戦線の同志の発言の後、関西大学社会学部自治会、京大教養部戦線、立命大文学部戦線、同志社大全学闘など次々に登壇する学生戦線からスト突入の報告と戦いの決意がのべられ、また、兵庫地区叛軍、北大阪地叛区軍等の労働者からは「労働者はすでに権力を問題にしながら、即ち、プロ独の実現を射程にし戦かっている」との発言をうけ、また隊友反戦の同志からは「自衛隊の外と内からの解体を貫徹するであろう」という発言をうけたのである。延々、二時間半にわたる集会の熱気、沖縄での熱気をそのままにうけ継ぎ、ただちに、天王寺野音へとデモは出発したのである。

デモは反帝戦線を先頭に叛軍、京学連の順で出発したのであるが集会での熱気と、今秋沖縄闘争への決意の固さと、デモ隊列の強固さに恐怖した権力は二重、三重のサンドイッチ規制をしき、恐怖の裏がえしとして、徹底したテロリンチをおこなったのである。隊列にたいし大盾でなぐるけるのリンチを行なうばかりか、あまつさえ、歩道を歩いていた市民を一人残らず、大盾をもった機動隊員と私服刑事が一諸になり、引きずり回わし、盾でなぐりかかるという暴挙に出たのである。

こうした権力の徹底した弾圧にもかかわらず、デモは終始、戦闘的に貫徹され、増々今秋闘争―沖縄返還協定批准を政治警察＝機動隊を殲滅し、実力で阻止するであろう決意を固めたのである。

全国の同志諸君！

我が反帝戦線は必ず、今秋武装闘争をその最前線で戦い抜き、機動隊を殲滅し、沖縄返還協定批准を阻止し、その戦いの中から不抜の非合法党を建設し抜き、階級闘争の地平を更に一歩前進させるであろうことを明らかにしておきたい。

立脚点主義を止揚し、資本主義批判の更なる深化を!!（下）
12・18路線のイデオロギーの総括と旧「左派」一派解体のために

才二次ブンドの限界との闘争〈2〉―「左派」について

このような「左派」の根底にある思想的偏向は、かれらが真摯に革命運動に対応しようとした限りにおいて、現実の運動の一側面を固定して反映しているところから生じた偏向である。だからそれは決して現実の運動と無縁な書斎の部から生みだされた空論ではない。思想は 運動なり実践の中にその物質的根拠をもっているのであり、だからこそわれわれにとって「左派」はたんなる外面的な批判の対象なのではなくて、総括の対象であり、われわれも共に共有し、直面している階級闘争の中心的課題との関係から 総括しなければならないのである。

より詳細な分析 は別稿＝論文に委ねるとして、ここでは簡単に「左派」との関係でのみ触れておきたい。まず第一に、ロシア革命の勝利以降の過渡期世界の階級闘争の基本性格は、相次ぐ先進資本主義国の革命の挫折と、その結果として、後進植民地諸国の民族解放闘争が世界革命の最前線を強いられるという構造によって規定されていることである。社会排外主義へと転化した社会民主主義（第二インター）との闘争を経て世界革命の統合司令部たる第三インター建設を押し進めたレーニンが、ロシア赤軍の世界赤軍への改組を要とする第三インターの武装に失敗したこと、それは主要には、先進ヨーロッパ特にドイツの革命の敗北と、帝国主義包囲下におけるロシア・プロレタリア独裁権力のネップにおける一定の後退と不可分の関係にあったのであり、このことはレーニンが第二インター的残滓との闘争において 一定の後退を強いられ、組合主義イデオロギーに 一定の敗北を喫したのだということを示している。このレーニンの後退を固定化し、帝国主義への屈服を準備したのがスターリン主義であり、その屈服を思想的・理論的・組織的に体系化して完成させたのが戦後ヤルタ体制におけるソ連共産党の社会帝国主義への転化であることは前述したとおりであるが、ここで問題なのは過渡期世界の階級闘争が、「労働運動と社会主義の結合」（レーニン）を解体され、帝国主義とスターリン主義とによって不断に分断され、イデオロギー的には組合主義との結合」、組織的には労働組合、政治的には「帝国主義と社会主義との融合」たる社会民主主義へと押しこめられることによって敗北を余儀なくされ、その結果として、社会主義は民族解放と結合し、その前線を担ってきたのだということである。

だが「世界プロ独―社会主義」の組織化の物質的基盤は、人類の富の大半を強奪し集中してきた帝国主義諸国（と其に屈服することにより分け前を得てきた社会主義国）にあるということもまた事実であり、だからこそ、この富の強奪に加担することを強制されてきた心臓部プロレタリアートと 共産主義者は、国際階級斗争における莫大な債務を負っており、この現実を直視することから出発することを何よりも問われてきたのだということを明確に自覚しておかねばならないのである。第二次ブンドの「組織された暴力と国際主義」の旗印は、この国際階級斗争の現実から出発し、当面の日本革命への展望と現実的に結びつけえなかったにも拘らず、心臓部プロと共産主義者に課せられた国際的任務を正しく提起したのであり、だからこそベトナム革命戦争の勝利的展開に助けられながら、反帝統一戦線を領導しえたのであった。

だが第二に、戦後日本の階級斗争も、この過渡期世界の先進国革命を流産させてきた権力構造の中から出発したのだということを把えなければならない。すなわち、半世紀以上にわたる階級斗争の中で、心臓部プロレタリアートが荷うべき歴史的使命にたいして、逆に国際階級斗争の前進の中で背負いこんできた巨大な情勢から、日本プロレタリアもまた自由ではないということであり、戦後の革命的危機を圧殺し、敗北を決定づけた日共六全協（五十五年）以後の中で、日本ブルジョアジーは帝国主義的労働運動の育成強化を組織的基盤として、その政治的代表＝社民を補完物として、まず民間大企業から官公労へと、労働者階級への抑圧と分断支配の体制を強化させてきたのである。戦後民主主義支配体制の一方の柱としてブルジョア権力支配の部分に組みこまれた労働運動たる帝国主義的労働運動への再編が、 六十五年までに民間大企業で完成され、官公労への 集中攻撃へ向かった六〇年代後半において、67・10・8は矛盾の中心にある官公労労働者と中小零細企業未組織労働者の前線への 登場を牽引したの

六十七年から六十九年に至る過程で日本階級斗争は直面した課題と革命的左翼の任務については、既に本論文の冒頭で述べた。つまり「反権力斗争から権力斗争への過渡」としての現段階において、日本プロレタリアートと共産主義者は、この半世紀において負ってきた債務にたいし、現実に権力問題に答えることでもって自らの任務としなければならない段階にあるのだということである。

われわれが直面していることうした任務との関係で、「左派」の思想的偏向も把えねばならない。かれらが、大衆一般の中にプロレタリアを溶解せしめた根拠は、第一に、米帝とソ連社会帝国主義を両軸とする 世界の権力構造の確立過程の中で、先進国革命がすべて圧殺され、その結果として労働組合を支配の物質的な基盤に再編し、組合主義をイデオロギー的立脚点にした「帝国主義と社会主義の融合」たる社民を補完とする権力体系によって抑圧と分断支配されてきた日本プロレタリアが半世紀以上にわたる心臓部プロの債務をいかにして果たしていくかといった問題の非常な困難性の前に、まさしく敗北し、その困難な、長期にわたる系統性を要とする任務を放棄し、かつ自らの逃亡を体系的に合理化しようとしたのだということである。第二に階級斗争の直面した権力問題にたいし、「プロレタリアートの組織化が決定的に遅れている」ということを理由にして、問題の核心に答えることを回避し、自らの右翼日和見主義を 隠蔽しようとする部分や、あるいは、官公労労働者や未組織労働者の政治斗争の前面への登場に主観的に意味付与しソビエト運動から「地区ソビエト権力」を展望したり、工場反乱から「労働者自己権力」を展望することにより、戦斗的労働者の陥入り易い意識に拝キして、それを固定化することによって、現実の階級斗争が労働者に課している任務の困難性から目をそらさせるといった俗流労働者主義にたいする反発である。こうした部分は労働者階級にだけ目を向けさせる」とレーニンが批判した組合主義政治にほかならず、まさに組合主義イデオロギーへの屈服であり、何よりも現代過渡期世界の権力構造とそこにおいて心臓部プロレタリアが負っている歴史的債務に無自覚であることを示すものにほかならない。その意味で、こうした部分にたいする「左派」の批判は正当であり、ただそれが反発以上のものでないことを、プロレタリアートを 大衆一般と溶解させるという原則上の誤まりを犯し、かつそれを体系化するという根底的偏向に陥ったことによって暴露されたのでめる。

おわりに

以上のように、現在の国際階級斗争が過渡期世界の止揚という地平に到達しており、その意味で過渡期世界の階級斗争の根底的な総括が可能となった 段階であって、わが日本階級斗争もそうした総体としての過渡期世界の止揚という地平においてはじめて自らの位置と任務も明らかにしうるということ。――この直面した課題に正面から対決しながらそれに答ええなかったために、わがブントの分解が始まったのだということ、そしてこの課題に答えるために、まずわれわれも又その中にあった反スタ・マルクス主義を完全に止揚することから、 われわれの12・18路線は出発したのである。だから12・18路線の画期的意義とは、現在、プロレタリアートと共産主義者の当面している任務を、過渡期世界の階級斗争を総体として総括する視点を、 国際的党派斗争の地平として明らかにし、そこにおけるスターリン主義の成立とその果しつつある反革命的役割を鮮明にすることによって、総体としての止揚を世界プロ独・第二[illegible]制として提起したこと、そして、こうした階級斗争の地平から日本の反スタ・マルクス主義はまさにブル性の故に破産せざるをえず、この止揚を抜きにして、革命党の建設がありえないことを明らかにしたことである。にも拘らず、現在、そうした意義を解体し形骸化させるような事態にわれわれが追いこまれたのは何故か。このことを明らかにするために12・18に至る過程の 総括を必要としたのである。12・18以降党内にはびこったいろいろな偏向は、とりわけ12・18に至る過程での旧神奈川県委「左派」フラクションのもっていた思想偏向の復活であり、それにたいして屈服しつつ、反スタ・マルクス主義批判の思想的出発点を、単なる立脚点に堕さしめ、思想を「理解して自分のものにできる」といった誤まった考え方に基づいて形骸化してきたが、まさしく指導部の破産として党の分裂を斉したのである。共産主義的世界観は、対象的に、つまり現実の運動の中で確証され深化されていくのであり、それは何よりも党的組織実践において 確証されることによって、現実的力となり、生きたものとなるのである。にも拘らず、12・18 以降の指導部は思想をそうしたマルクス主義的原則において把えるのでなく、きわめてブルジョア的に しか把えないことによって、 まさに実践的に破産したのであり、そしてそうした誤まりを一部分われわれも共有していたことを自己批判的に総括しなければならないのである。

12・18以降における政治路線の不明確さをめぐっての論争、今回の分裂の 契機となった斗争総括をめぐる論争の根底に、マルクス・レーニン主義の原則をめぐる思想斗争があったこと、そしてわれわれは徹底的・系統的な思想斗争を展開できずに、党内の思想的偏向を是正しえなかったことをわが同盟に結集している戦斗的学生・労働者・農民・市民の諸君にたいし深く自己批判したい。

ただ、最後に確認しておかねばならないのは、今回の思想斗争は12・18に獲得した 思想的出発点をいかに深化するのかということを、現実の階級斗争のるつぼの中で、のっぴきならない形で問いつめられたのだということであり、12・18 降の十ケ月の実践と現実の階級斗争が突きつけた課題に答えるためには、われわれの体内に残るブルジョア思想のほんの一かけらとも徹底的斗争をしなければならず、また、そうしたブルジョア思想の残滓をひきずったままでは決して現実の運動に答えていくことのできない、そういう段階に日本階級斗争が到達しつつあるのだということである。

年末一時金三割カンパの要請

全国の革命的同志諸君！プレロタリア戦士諸君！烽火読者諸君！

我が共産主義者同盟委員会は、党内―分派闘争を圧倒的に勝利しぬき、「武装闘争の再開」と「計画された組織建設（体系的非合法党の建設）」として、21・18の多大な成果を無に帰することなく、10・8から十一月に至る沖縄闘争のるつぼの中でその第一歩を克ちとった。

まさしくそれは、階級攻防の鉄火の中のくぐりぬけ、烽起を実現する「綱領の党」への転換を我が同盟に要求しはじめており、烽起に向けての具体的準備を開始しなければならないそのような段階に突入したのである。

日本の階級闘争は、六九年十一月安保決戦の敗北以降、その前進が生み出した反革命の包囲網に押し込められ、その反革命を粉砕するまいを通してしか階級闘争の前進はありえないことは誰の目にも明らかにしたしその事をやり抜く革命家の集団＝党の建設がその解決のための緊急の課題であった。

我が同盟は、赤軍派との党派闘争以降、烽起―臨革政府樹立を領導しぬく非合法党の団結の問題として、世界社会主義―世界プロ独を建設する世界党―世界赤軍の問題として、党のイデオロギー、組織、政治の内容をめぐる激烈な党派闘争を闘い抜いたのである。

最早、大衆運動の高揚や沈滞に一喜一憂することのない、明確な政治戦略と戦略化された組織的、実践的任務を断固として遂行し抜く不抜の前衛党が打ち立てられねばならないし、我が同盟は全力量を集中し、それをやり抜く決意である。

現在、沖縄返還協定批准を中軸にすえて、日常の侵略反革命攻撃は全人民の上にますます広汎に かつ強権的に開始された。そして、我が同盟を先頭とした革命的党派に対して、政治警察は、白色テロ、リンチ、スパイの強要などの含む攻撃を開始しはじめている。

だが、日本の階級闘争は、6・17闘争以降、9・16三里塚、11・1沖縄として、新たな革命的胎動が 開始され、新しい段階に入った。敵権力との攻防が、勝利を決着づける「勝利か死か」の関係に入った。我が同盟は、それに打ち勝ち、かつプロレタリアートを組織化し、日帝の 侵略反革命体制を粉砕しぬく実践的任務を確立した。

同志諸君！我々の闘いは更に多大な困難と忍耐を要求するだろうし、未だ日本の階級闘争が経験しえなかった本格的革命闘争に向け、我が同盟はそれを遂行する用意がある。

全国の革命的同志諸君！我が同盟とともに、世界社会主義建設への曙光を共に闘いとろうではないか。

〃全国の革命的同志諸君の、我が同盟への圧倒的なカンパを要請します。

一九七一年十二月

共産主義者同盟全国委員会